

MASセミナー 第13回

「しあわせを感じる建築の色、街の色」

2013.12.07 (土) PM 1:30 ~
JIA建築家クラブにて



建築家 田口 知子



日本建築家協会 関東甲信越支部 港地域会

街の色は風土と人がつくりだすもの

僕が最初に興味をもった画家は佐伯祐三だった。彼は画家としての短い生涯の大半をパリですごした。一時、帰国するもしばらくするとまた渡仏してしまう。それは日本では最後まで彼にとって絵筆をもつ風景の題材を見いだせなかったからと思う。そのことは都市に暮らす僕らにも悲しい現実をつきつけていると感じる。

パリの裏町、赤茶けた煉瓦の色と、ときにあざやかなポスターの色がなんの違和感も感じさせない街、風土から生まれる素材の色、そしてそこに暮らす人たちの本質(カラー)が全ての根底にある。



今井 均

見つけたしあわせの色

色については、どうしたら「しあわせを感じるんだろう」と、街を歩きながら考えました。で、大自然にある色なら、きっと充足と安心を感じる。つまり幸せを感じるんじゃないか、と気がつきました。大地、つまり土の色や石の色。空の明るいブルー。樹木の緑や木肌の色。人肌の色もありますか。これらから質感に注意して「しあわせの色」を選び出せばいいのです。まだ自然には、熱帯魚のようなアクセント・カラーもあるわけですから、化粧のアイ・メイクやネイルのように、ここぞと言うところには、個性的な色があってもいいんじゃないでしょうか。それらが陽のしたで地場産の色でまともれば、こころが落ち着き、しあわせになれるでしょうね。



大倉 富美雄

建物・街並み・色

外界からの情報の80%は目から入ってくると言われます。建物に関する目からの情報は形であったり素材であったり色であったり...そして設計プロセスではまず【空間・形体】をまとめ【材料・素材】を選び最終段階で【色】を決め込んでいく、という流れが一般的です。この伝ていくと色のヒエラルキーは低い？ところが実際は建物に限らず車や洋服やインテリアの第一印象は形や素材よりもまず色が左右します。街並・建物と色について考えてみます。



鈴木 理巳

色彩とその面積の意味

住宅の外壁やインテリアの色を選ぶとき、日本人は白とか、ベージュ、グレーといったナチュラルでニュートラルな色を選ぶ方が多いですね。めずらしい、はっきりした色というのは、好き嫌いが前面に出やすく、建築にそのような色を使うと、大きな面積を覆うため、人に強烈な印象を与えてしまいます。洋服や家具、小物の色を選ぶときの色とは、同じ色でも違った意味が出てきてしまうのです。それでは、建築はどうやって色を使っていけばよいのでしょうか？人を、町を幸せにする、建築の色の使い方について、一緒に考えてみましょう。



田口 知子

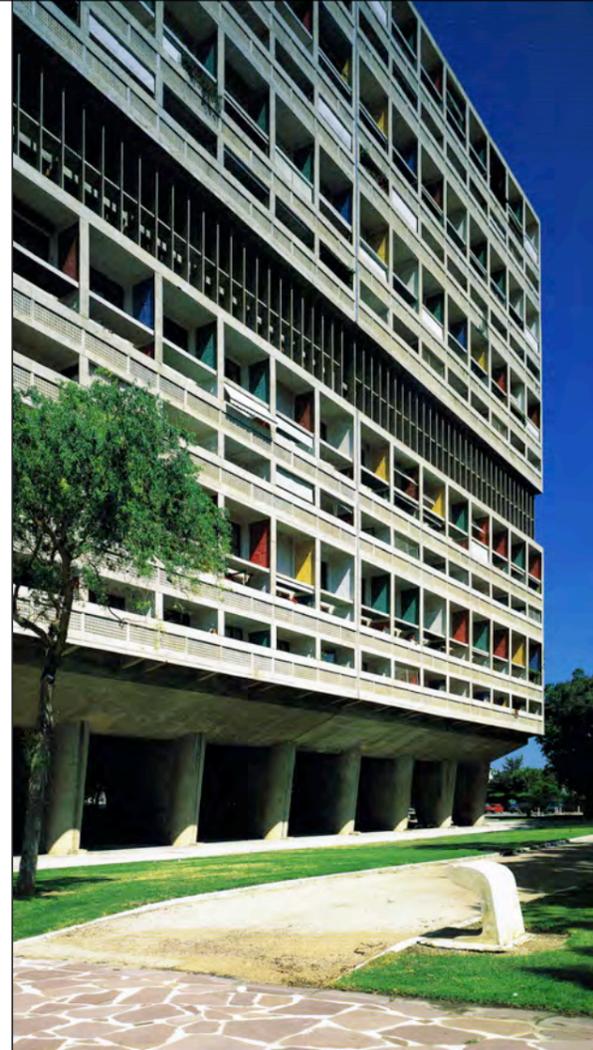


街の色彩と屋根

街を俯瞰したり遠方から眺めると屋根の連なりが見えてくる。奈良・京都では「葺のうすねず」と葺の波が古都の風土を引き出している。沖縄では「赤瓦の屋根」が南国らしい暮らしを引き立てる。地元の素材や土で焼かれた瓦には地域の色が込められている。しかし、石山修氏が監修した伊豆松崎町の「うこん色の屋根と白い外壁」はなぜかなじんでいない。単に色を指定しても街の魅力やしあわせまで行きつかない。なぜなんだろう？



宮田 多津夫



公共の場に放つ色は、素材と一体の品が備わるべき

色の話は素材と表裏一体である。自然界にある天然の色であれば心地よい楽しさがある。太陽の陽のもとにきらきら輝く南国の花々の色もその土地にあればこそ輝く。日本の伝統色は草木染めや漆、群青色や黄金の輝きもそれが本来もつ設いの中で放たれば美しい。インテリアの空間であれば冒険も良い。個人の数寄なのである。しかし、ひとたびアウトテリアとなると、話は変わる。公共の場に放つ色は、素材と一体の品が備わるべきと想っている。



村上 晶子

色使いはメリハリが大切

色使いはメリハリが大切だと思います。すべて同じようなトーンだと、つまらないと思います。ヨーロッパの街を歩くと、その地方独特の石やレンガにより、壁や屋根が統一感のある色合いになっています。同時に窓枠や扉などに個性的な色が塗られメリハリがあり、飽きない街並となっています。個性的な色が過剰な場合は色の騒音となり、疲れる街になってしまいます。つまり、適度なバランスがメリハリをつくり、バランス感覚がセンスと言えると思います。



連 健夫
(むらじ たけお)